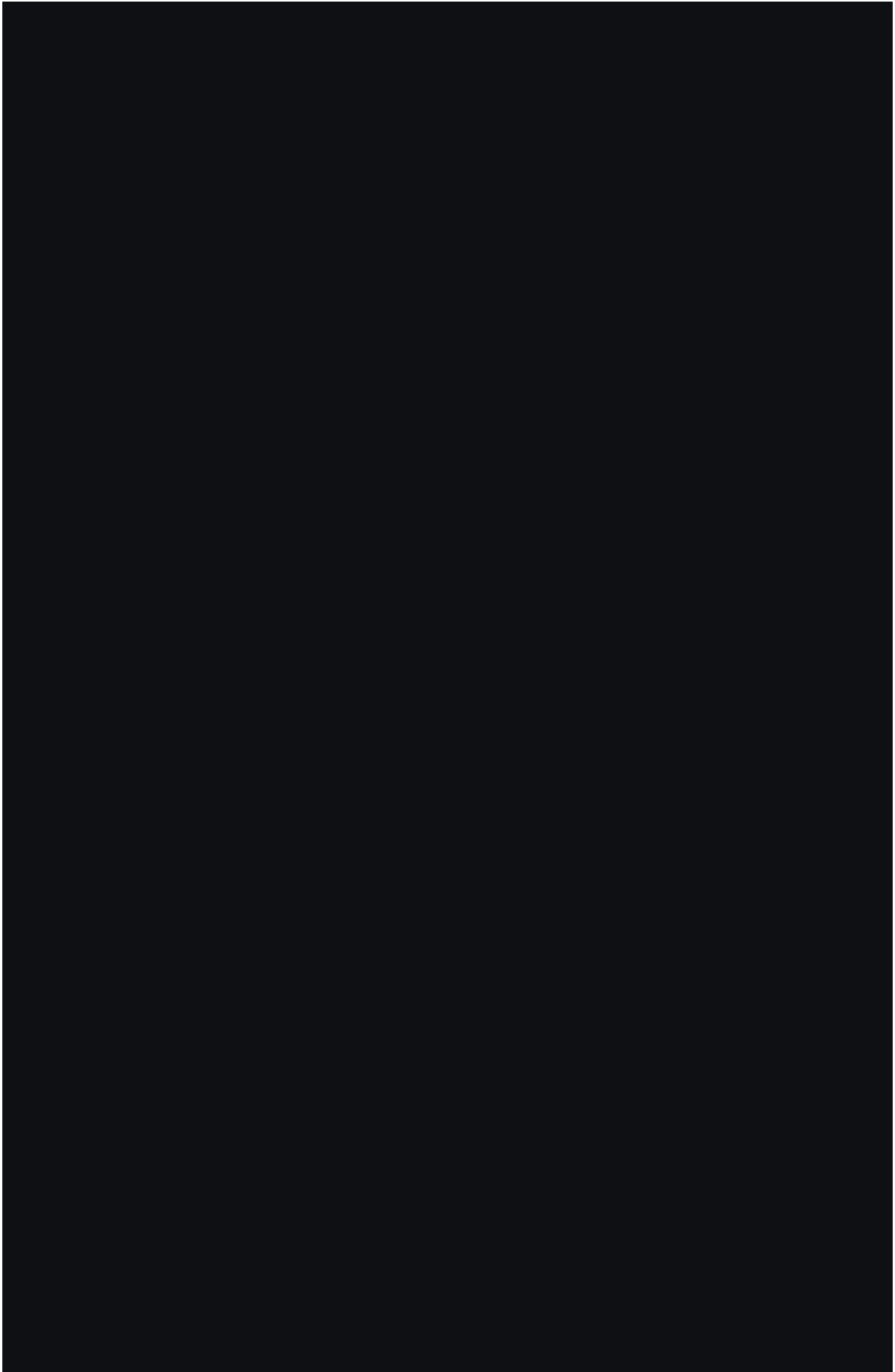


Special Thanks to the beautiful artist,

Bec Winnel



・ ・ ・ 目次 ・ ・ ・

1

赤いタンポポ

10

エアカレ

15

ボクだけのキミ

赤いタンポポ

大学を卒業してから三年。恭介は大企業の会社員という肩書きを捨てた。絵里子のことがあったからだった。

絵里子との出会いは一年前。互いの会社の近くにあった弁当屋に通っていたのが始まりだった。二人は毎日のように同じ弁当屋で顔を合わせていたが、ある日を境に言葉を交わすようになった。恭介は絵里子のアドレスを聞きだし、それらしい理由をつくっては二人で会うようになる、自然と結婚を考える間柄になっていった。

絵里子は恭介のふたつ下で、恭介と出会っていなくともきっと早いうちに良い旦那を見つけていたであろう魅力があった。恭介にとっては幸運だった。二人は例に漏れず、小さなことで喧嘩をすることもあったが、その日のうちに仲直りをしてはまた笑い合うという風に過ごして

いた。

その電話が鳴ったのは、冷たい雨の降る土曜日のことだった。

「えりちゃんが……」

電話の向こうで聞こえる母親の声に、恭介は強く言い返した。なんで、どうして絵里子がそんな目に遭うんだ。どこに向かっていた？ どうしてそうなった？

母親は、ただ泣きながらその後の予定を伝えた。恭介は現実を受け入れられないまま、絵里子に永遠の別れを告げるほかなかった。

そのまま消えるように会社を去った恭介は、アパートから一步も出ることなく無意味な毎日をやり過ごした。貯金が底をつく頃、ふらふらと実家に戻った。遠く離れた田舎で良かったと思えたのは、このときだった。明かりのない自

室に一人、窓辺に置いた鉢植えを眺めるだけの生活を再開する。鉢の中には、生前の絵里子が植えたタンポポの綿毛が眠っていた。

幸い、芽は出た。ただぼうっと小さな綿毛が少しずつ姿を変えていく様子を眺めながら、恭介はあの懐かしい声を思い出しては部屋の壁を叩いた。その音が階下の店先を訪れた客に聞こえると、母親は品を渡して客を帰した後で、恭介の部屋へと続く階段をのぼり、ドアの向こうまで来て慰めの言葉をかけるのだった。

ある朝、窓辺に置かれた鉢の中で、ついにタンポポが花開いた。が、恭介はその異様な姿に息を呑んだ。すっきりと両手を広げた花びらが、真っ赤に染まっていたのだ。おそろおそろ花びらに触れてみると湿っているわけでもなく、ただただ赤い。まるで絵里子の恨みでも買ったような鮮やかな赤色に、恭介は胸が締めつけられ

た。

「あんたもそろそろ何かしたほうがいいんじゃない」

しばらくして、母親が店の手伝いをしてみてはどうかと提案した。恭介は仕方なく亡霊のように店先に現れ、棚の空いたスペースに酒瓶を並べることを始めた。日課というのは不思議なもので、考えなしに続けていると体が勝手に動くようになる。店を訪れた客の中には恭介の事情を知っている馴染みの者も多く、できるだけ親切にと接してくれるのはありがたかった。強く言われようものなら、どうにかなってしまいそうだった。

さて恭介の部屋で目一杯に開いたタンポポは、待てど暮らせど枯れる気配を見せず、おかしいくらい元気になっていた。ネットで調べてみても、

花が咲いてから綿毛をつけるまでは数日だと書いてある。しかしこのタンポポは、もう何週間も咲いたままだ。とはいえ、摘み取る気もなかった。

しかしそれは突然やってきた。恭介がいつものように布団から起き上がり、カーテンの隙間から見える雨粒から視線を落とすときだった。つい昨日まで両手を広げて花開いていたタンポポが、閉じているではないか。赤い色合いをわずかでも見せまいと、きつくその花びらをしまし込んでいる。こわばったようなその姿に恭介は不安を感じた。慎重に配達の前準備をして外へ出た。

陽が傾くにつれて細かな雨は勢いを増し、恭介の車が山道を昇る頃にはフロントガラスを激しく叩いていた。後ろに積んだ酒瓶がうるさくぶつかり合う。慣れた道ではあるものの、強い雨足に視界が歪み、どこまでが道なのか、よく

わからない。どうにかハンドルを切りながら下りへと続く道を右へ曲がる。

……と、ふいに車体が後ろに引き寄せられたかと思うと、次の瞬間、恭介の体が大きく弧を描いた。ハンドルを握っていた両手がすかさず顔を打ち、目の端に、真っ黒な崖が口を開けて待っているのが見えた。

『終わった』

そこから先は、あっという間で覚えていない。

「恭介……！」

ベッドの上に仰向けになった息子を見るや、倒れこむように駆け寄る母親。恭介はじっとその姿を見つめる。「見た目ほど重傷じゃないん

だ」と、言葉をかける。

「少し様子を見たあとで退院できますよ」

看護師の声に、母親は「大ばか者！」と言ってから安堵の表情を浮かべた。

「あそこから落ちて骨折もしていないなんて、道柴さん、強運ですね」

「ええ」

恭介は窓の外に目をやった。よく晴れている。

看護師の言ったとおり、恭介は数日入院をしただけで家に帰ることができた。自分の部屋のカーテンを開けると、窓のロックを外し向こう側へと押し開く。

「ありがとな」

そう言って、恭介は真っ白な綿毛をたくわえたタンポポに優しく息を吹きかけた。小さな綿毛は円を描きながら、風に乗って空のほうへと

昇っていった。すっきりとした青空が、彼女の笑顔によく似ていた。

エアカレ

梨架は小さい頃から男の子に間違われることが多かった。髪はいつも短く、小学校のあいだはクラスの男の子とサッカーをして遊ぶような女の子だった。

残念だったのは、中学に上がるころには、女の子たちの輪の中に入れなくなっていたことだった。一緒に遊んでいた男の子たちにはついていけなくなり、かといって今さら女の子の話にも馴染めない。内心は梨架も乙女だったが、小学校からの同級生を前に、今さら可愛らしくなることもできずにいた。お弁当は、女子トイレの中で食べるが増えた。

「手紙が来てるわよ」

ある日の夕方、母親がうす桃色の封筒を梨架に手渡した。誰だろうと思い開けてみたところ、

『おめでとうございます！見事エアカレ（※正

式名称：エアー彼氏) のモニターに当選されました！』

と書かれた紙が一枚入っていた。今どき何かのひっかけだろうか。

興味本位で一番下にのっていたQRコードを読み取ってみる。携帯でページを開くと、理想の彼氏を尋ねるアンケート項目がずらりと映し出された。こういうのは好きだ。答える質問は山ほどあったが、梨架は悩むことなく入力した。それから、送信。……何も起こらなかったが、予想通りだった。

翌朝、梨架が玄関の扉を開けたとき奇跡は起こった。回答どおり、『エリアスと白騎士の調べ』に登場するレオン様と瓜ふたつの美男子が、玄関の前に立っていたのだ。まるで梨架を待ち続けていたみたいだ。

「一緒に登校したいと言っていたらどう？」

梨架は嬉々としてレオン様の胸に飛び込んだ。どうして？くらくらすのような甘い香りがした。

レオン様はそれから毎日現れ、梨架を出迎えた。彼氏の話がウケたのか、梨架はクラスのイケてる女子グループでお昼を食べられるようになった。夏になると、グループにいた真弓という子とお互いの彼氏を連れてダブルデートに行く約束までとりつけた。

ただ、梨架にはひとつだけ気がかりなことがあった。レオン様のうなじの辺りにうっすらと刻まれた、8ケタの数字のことだった。ニイゼロイチゴウゼロハチゼロサン。その下にさらにもう4ケタ。イチハチサンゼロ。梨架は何となくわかっていたが、極力考えないようにして過ごした。

ダブルデートの当日、レオン様はまたどこからともなく現れ、浴衣姿の梨架の手を優しく引いて歩き始めた。そしてどういふわけか一人で現れた真弓と合流しようとしたまさにそのとき、レオン様は蒸発するようにぼうっと舞い上がり、そのまま見えなくなってしまった。

梨架は空を見上げた。もうレオン様の気配はない。ゆっくりと視線を戻すと、苦笑いをする真弓と目が合った。

「あたしのカレも、さっき……いなくなっちゃったんだ」

二人は同じタイミングで笑い出した。それから肩を並べると、花火会場へと向かう人混みの中に消えていった。

ボクだけのキミ

忘れていた記憶を思い出そうとするとき、喜びにも似た懐かしさを伴うことがある。芋づる式に思い出される物語が苦痛なものであったとしても、時が経つほどに美しい思い出が顔をのぞかせるようになるのだ。

スーツ姿の圭太が、夕暮れ時の交差点でかつての想い人を見つけたときも同じだった。言葉を交わした放課後の教室や、言い出せないまま迎えた四度目の卒業式が、目の前の人混みと一緒に押し寄せてくる。このまま歩けば、すれ違ふ。そう思ったときには、声をかけていた。偶然の産物が、二人の運命を変えた瞬間だった。

「久しぶり！」

かつての圭太を闇から救い上げた人間が、そう言って笑顔を見せた。よかった、と圭太は心から感謝した。無視をされようものなら、声をかけたことをひどく後悔していたかもしれない。

向こうは急いでいたようで、そそくさとアドレスを交換してその場は終わったが、折をみてはその後どうしていたのかと話す機会に恵まれるようになった。

会うたびに色褪せていた想いが蘇り、ある飲み会の席では危うく手を出しそうになり踏みとどまった。時間をかけよう。これも何かの縁なのだ。焦らず進めたほうがいい。

暇さえあれば携帯を気にする生活が二ヶ月ほど続いたある日のことだった。駅前の店でワイシャツを選んでいた圭太は、聞きなれた声がしてハッと首を伸ばして声のほうを見た。

(やっぱり！)

あの笑顔がたまらない……。が、喉にこみ上げた淡い期待は、すぐに胃の奥底へと墮ちていった。背の高い誠実そうな男性が、華やかなワンピースを着た女性と笑い合っている。二人の

様子で察しがついた。なんだ、よかったじゃないか。幸せ、そうで――

ふと我に返り、圭太は慌ててその場を離れた。二人の声がすぐそこまで来ていた。二人の幸せそうな様子を背中で見つめながら、圭太はひとりマンションへと帰った。

翌週、圭太がぱらぱらと新聞をめくっていると、見出しのひとつに目を奪われた。地方にもつ別荘で、圭太が優雅な朝を迎えたころだった。『都内会社員、退社後に行方不明か』

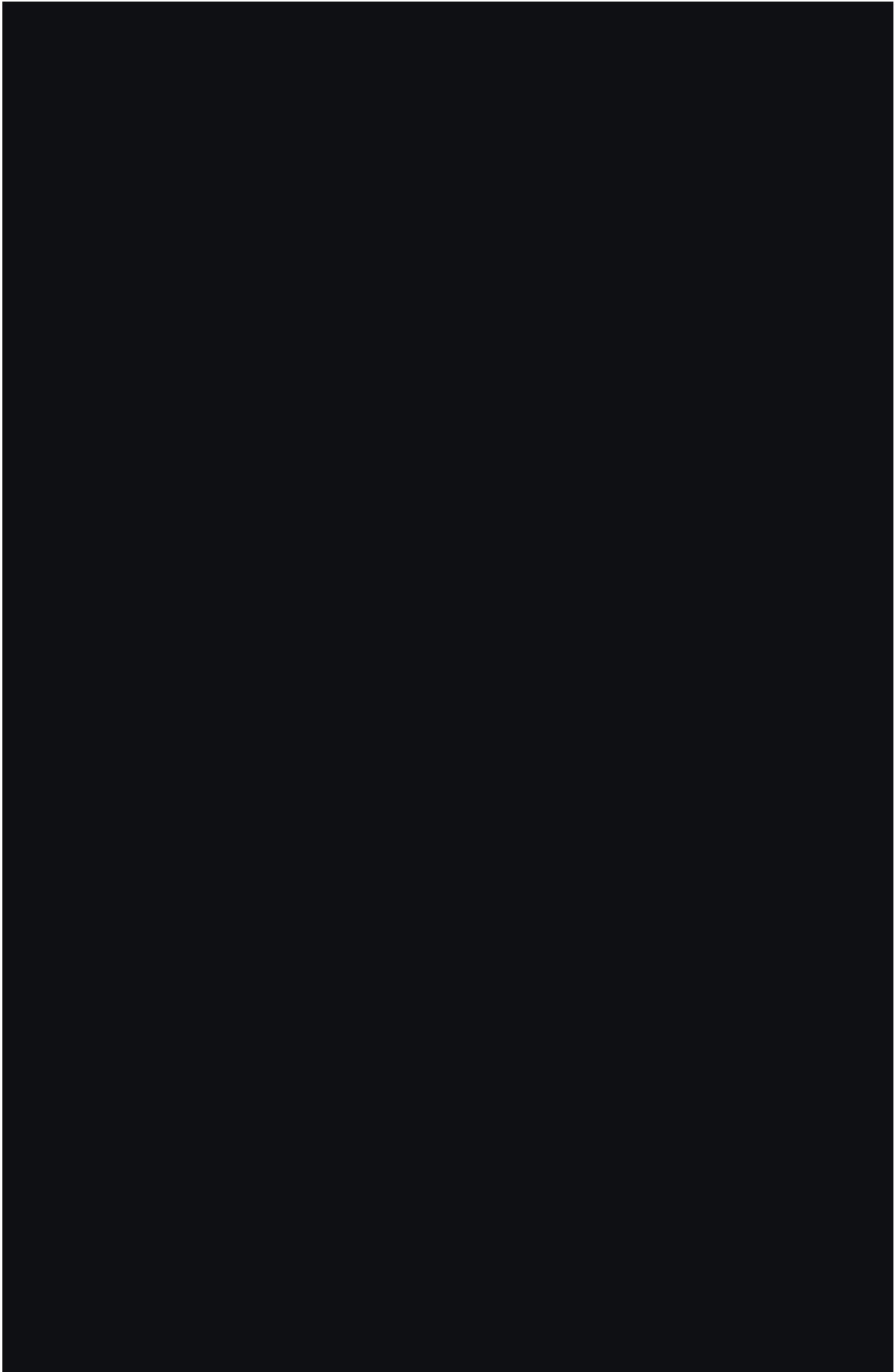
つらつらと内容を読む。間違いない。ソファから身を乗り出し、テーブルに広げた新聞から慎重に記事を切り抜いていく。チャックのついたビニール袋にしまい、その足で裏庭へ向かう。ドアを開けてわずかな階段を下りると、痩せこけた森へと続く寂しい庭へ足を踏み入れる。

しんとした木々の足元にひとつ、綺麗に仕上

がった落ち葉の山が見える。圭太は落ち葉の山の前でひざまずいた。指先を揃え、丁寧に葉を掻き分けていく。

「僕がしっかりと面倒を見るから。心配いらないからね」

枯れた葉のあいだに眠る青白い男の顔に、圭太は優しく微笑んだ。これからはずっと、二人だけでいられるからね。



Written by

Shusuke Kuba



Art by

Bec Winnel



オーストラリア出身のイラストレーター、アーティスト。
グラフィックアーティストとしての緻密さと
自身の情緒的な側面とを
洗練された肖像画の中に描き出す。
作品に漂うやわらかな雰囲気は、
色鉛筆とパステルの筆づかいによるもの。

<http://www.becwinnel.com/>